

4 日間の有効な実地訓練を背景に実災害への

DMAT 出場が短期間で行えた経験

丹野 克俊ほか、日救急医学会誌 2007 ; 18 : 769-774

2018 年 11 月 30 日 災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1. はじめに

災害派遣医療チーム DMAT (Disaster Medical Assistance Team) は、災害の急性期 (概ね 48 時間以内) に活動できる機動性を持った専門的な訓練を受けたチームであり、広域医療搬送、現地での災害拠点病院等の支援、域内搬送、現場活動等を主な活動としている。実際に現地へ向かう際に、どのような準備が必要か、具体的なイメージが足りないために 4 日間にわたり DMAT の派遣訓練が行われた。その 2 ヶ月後に佐呂間竜巻災害が発生し実際に出動することになった。訓練効果により初期対応が円滑に行われた。本論文から、DMAT の今後の訓練に何が必要であるかを考察していく。

2. 訓練の概要

平成 18 年 8 月 31 日に発生した十勝地方の地震に対する派遣要請を想定した。出勤から帰院までを訓練期間とし、WRC ラリージャパンにおいて敷地内での救護活動を DMAT 活動と見立てて訓練を行った。

<事前準備>

- ・連絡先のリストアップ…DMAT 指定医療機関、当該地域の中核医療機関、消防機関など
- ・チームスタッフの確保…交代制勤務を考慮。医師 2 名、看護師 2 名、事務 2 名
- ・連絡手段…無線機、衛星電話
- ・車輛…救急車とワゴン車各 1 台
- ・生活手段…ホテル、ガスコンロ
- ・広域災害・救急医療情報システム内の DMAT 管理画面への入力、操作の確認

<訓練結果>

病院出発までの所要時間は約 15 分であり、現地へは約 5 時間で到着した。(距離約 270 km)。訓練中の問題点としては、

- ・観客が多く搬送ルートの確保が困難、観客が道を塞ぐ
- ・車の排気音、観客の賑わい、放送等の騒音により傷病者の声が聞こえない
- ・軽症者に対する資機材の不足
- ・収納ボックスから物品を探すのに時間がかかる

といったことが挙げられた。

3. 佐呂間竜巻災害の概要

平成 18 年 11 月 7 日 13 時 20 分、佐呂間町で竜巻災害により、死者 9 名、重症 6 名、軽症 25 名の死傷者が発生した。

15 時 25 分に厚生労働省から竜巻の発生情報と DMAT の派遣の可能性の連絡を受け、準備を開始し、北海道庁保健福祉部、被災地近隣消防、札幌医科大学病院と連絡を取り、情報収集を行った。事態はほぼ収束しているように思われたが、途中退却も想定したうえで、厚労省からの連絡を受け 15 時 55 分に派遣決定となった。準備の確認を終え、16 時 20 分に救急車で出発した。しかし、19 時 25 分に厚労省、19 時 50 分に同庁から事態収拾の連絡があり、目的地まで約 2 時間の地点で撤収となった。

4. 考察

DMAT は日本全国に 703 チーム（平成 22 年 3 月末）登録されている。1 チーム当たり医師、看護師、事務を含む 5 名程度であり、災害時には DMAT 同士の連携が必要である。DMAT の訓練として、防災の日に合わせた広域医療搬送訓練があり、多くのチームが参加しているが、すべてのチームの参加は難しく、原則として各々のチームの自主性に任されている。

本論文の佐呂間町への災害派遣では、第一報から出発まで 1 時間以内であり訓練の効果が発揮された。しかし、問題点もいくつかあり、比較的軽症者のための資機材が不十分であったこと、DMAT 管理画面への入力を熟知している者が一人しかおらず、引継ぎに時間的ロスが生じたことなどがあった。災害発生後、急性期に活動する DMAT の機能を十分に発揮するためには、最低 2、3 日の災害派遣を想定した訓練を定期的に行うことが不可欠である。災害によって、DMAT の活動中に生じる問題は多種多様であることが考えられるため、実際に経験した事例を共有するために、地域レベルで他病院の DMAT チームとの情報交換や交流する機会を設けることも必要である。そしてその経験を生かした訓練を定期的に行うことで、実際の災害現場でより多く救命が可能になることが期待される。

【参考文献】

DMAT 事務局 HP

<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001khc1-att/2r9852000001kh11.pdf>